

ゆめ で はは
夢に出る母

みかみ
三上りょう

わたし はは びょうじゃく
私の母は病弱なひとだった。

あまり外に出られないかわりに、庭で花を育てたり、一緒におやつを作ったりしてくれる優しい母。

その母も私が十歳のときに病気が重くなり亡くなってしまった。

それからというもの、よく母の夢を見てきた。

ただ夢のなかの母とは一度も喋ったことがない。

あるときは歩道橋の反対側にいて優しい顔でこっちを見ていたり、またあるときは崖の向こう側に立っていて、とても険しい顔をするので近づくことすら出来ないのだ。

けれど目が覚めたときの気分はとても良い。母に会えたことが何より嬉しかった。

そんな夢も大人になるにつれて少しずつ見る回数が減ってきた。

ある夜、数年ぶりに見た夢の様子はいつもと違っていた。

当時、家族三人で暮らしていた家に母と二人でいるのだ。

テーブルの上には^{うえ}苺と^{いちご}生クリームが^{なま}たっぷり乗ったケーキやワッフル、^{えほん}絵本に^で出てきそうなほど積み上がった^あパンケーキ、^{ねこがた}猫型のクッキーなど^{ほか}他にも^{すきま}さまざまなおやつが^{なら}隙間なく並べられていた。

^{はは}母はというと、^{なに}何かを^{さが}探しているようでキッチン^{すみ}の隅に^こしゃがみ込んで^{おと}ゴソゴソと音をたてている。

「おかあさん？」

^{こえ}と声をかけようとする^{さき}と、それより先に

「ねえ、テーブルの上^{うえ}のおやつ^{ぜんぶ}全部^た食べていいからね」

^いそう言われてハッとした。

^{ちが}違う、この人^{ひと}は^{はは}母ではない。

^{はは}母なら「ねえ」ではなく^{なまえ}名前^よで呼ぶはずだ。

それと^{どうじ}同時に^{みょう}妙な^{きも}気持ちに^{つぎつぎ}次々と^{おそ}襲われた。

この人^{ひと}に^{なまえ}名前^しを知られてはならない。

この人^{ひと}をおかあさんと呼んではならない。

目の前^めにいる^{まえ}母^{はは}によく似た^に誰か^{だれ}に、^{にせもの}偽者だと^き気が

づいたことを^{さと}悟られては^きいけないという^{きも}気持ち^ささえ^{はたら}働く。

そこで^{いま}今は^{なか}お腹がいっぱいでおやつは^{いらない}いら

と、^{ことわ}やんわり断って^{いえ}家を出ようとした。

すると^{すかさず}すかさず、

「ねえ、^{にかい}二階の^へ部屋^やを^{さが}探してきてくれない？」

「ねえ、^み見つけてくれるよね？」

そう言われたので黙^{だま}って二階^{にかい}に上^あがることにした。

「ないなあ」

一階^{いっかい}にも聞^きこえるように大^{おお}きな声^{こえ}で独^{ひと}り言^{ごと}を言^いいながら、何^{なに}を探^{さが}せば良^よいのかもわからず何^{なに}かを探^{さが}すふりをする。

しばらくすると一階^{いっかい}の物音^{ものおと}がピタリとやんだ。様子^{ようす}を窺^{うかが}うために、ゆっくり一階^{いっかい}に下^おりると部^へ屋^やのなかが変わ^かり果^はてていた。

まるで廃^{はい}屋^{おく}。ドアや床^{ゆか}が朽^くちている。さっきまでリビングにあっ^かた家具^ぐは消^きえており、あ^{ひと}の人もいない。ただひとつ、おやつの並^{なら}んだテ^てーブル^ぶル^るだけが真^ま新^{あたら}しいま^とま取^のり残^こされていた。明^{あか}るか^あった窓^{まど}の外^{そと}は夕^{ゆう}日^ひが沈^{しず}んで暗^{くら}くなるう^くとしてい^らる。こ^こで夢^{ゆめ}は終^おわった。

夢^{ゆめ}から覚^さめた瞬^{しゅん}間^{かん}、耳^{みみ}元^{もと}で知^しらな^い男^{おとこ}の^{こえ}声^{こえ}がした。

「もう起^おきち^ちゃ^ちったの」

それ以^い来^{らい}、何^{なん}度^ども偽^に者^{せもの}の母^{はは}が^で出^でてく^る夢^{ゆめ}を^み見^みる^るよ^うにな^なった。

そ^{ゆめ}して^さこの^{かなら}夢^{ゆめ}から^{みみもと}覚^さめた^しと^しき^には^あ必^{かなら}ず^{みみもと}耳^{みみ}元^{もと}で^ああ^{おとこ}の^{こえ}男^{おとこ}の^{こえ}声^{こえ}が^する。